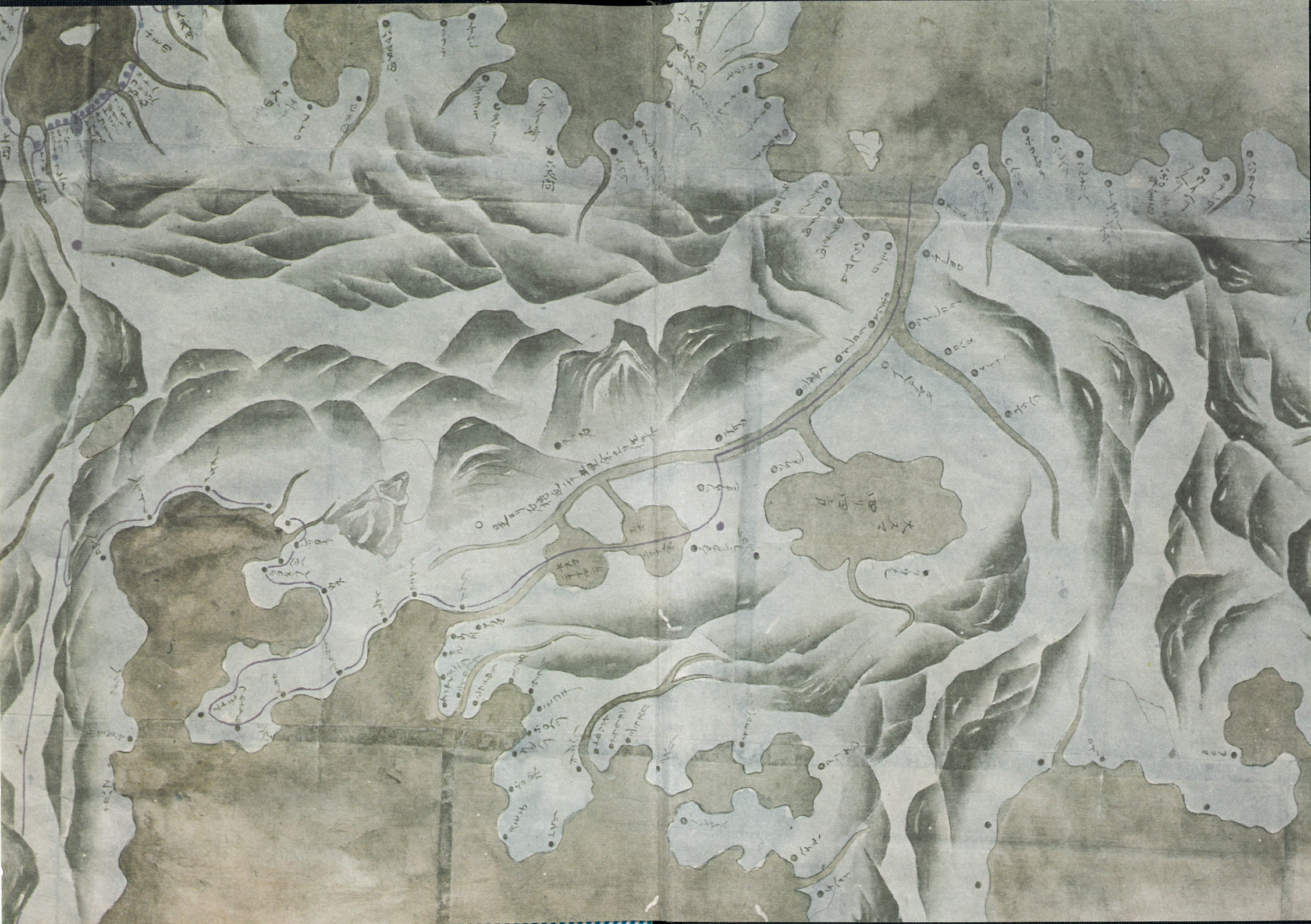




苫小牧市史

上
卷

苫
小
牧
市



市 旗



市の木 ナナカマド



飛驒屋文書蝦夷之図（年代不詳）〔飛驒下呂町郷土資料館蔵〕



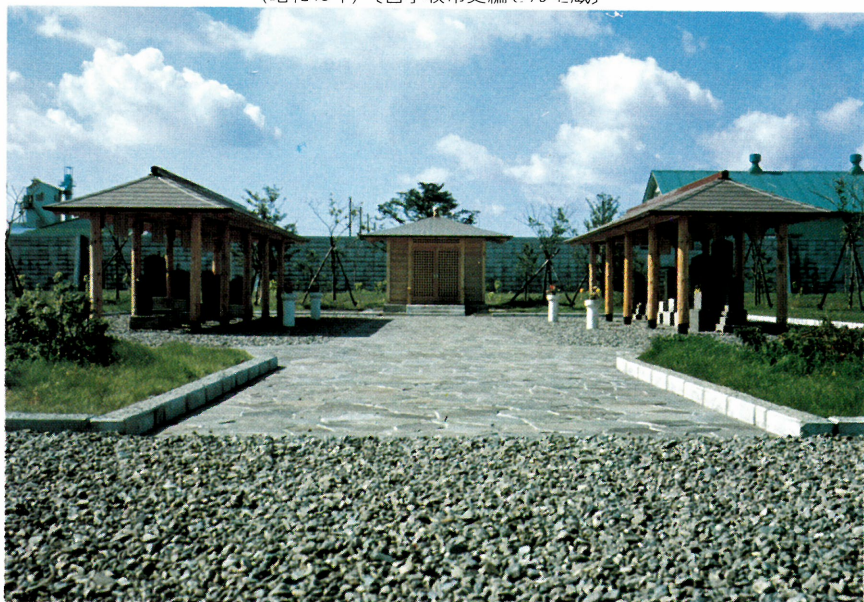
勇弘之景（鍋島文庫、文化7年）〔佐賀県立図書館蔵〕



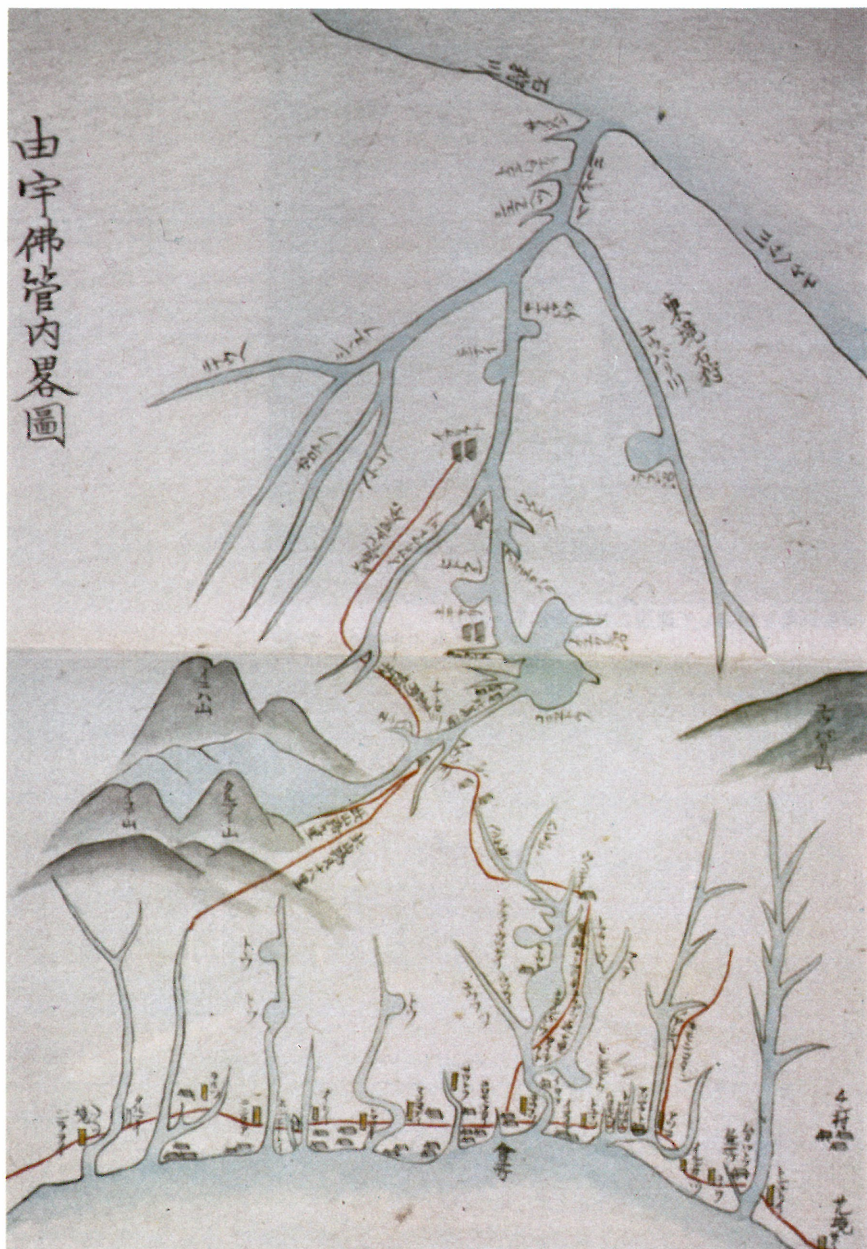
東蝦夷地ユウフツ場所之図（年代不詳）〔市立函館図書館蔵〕



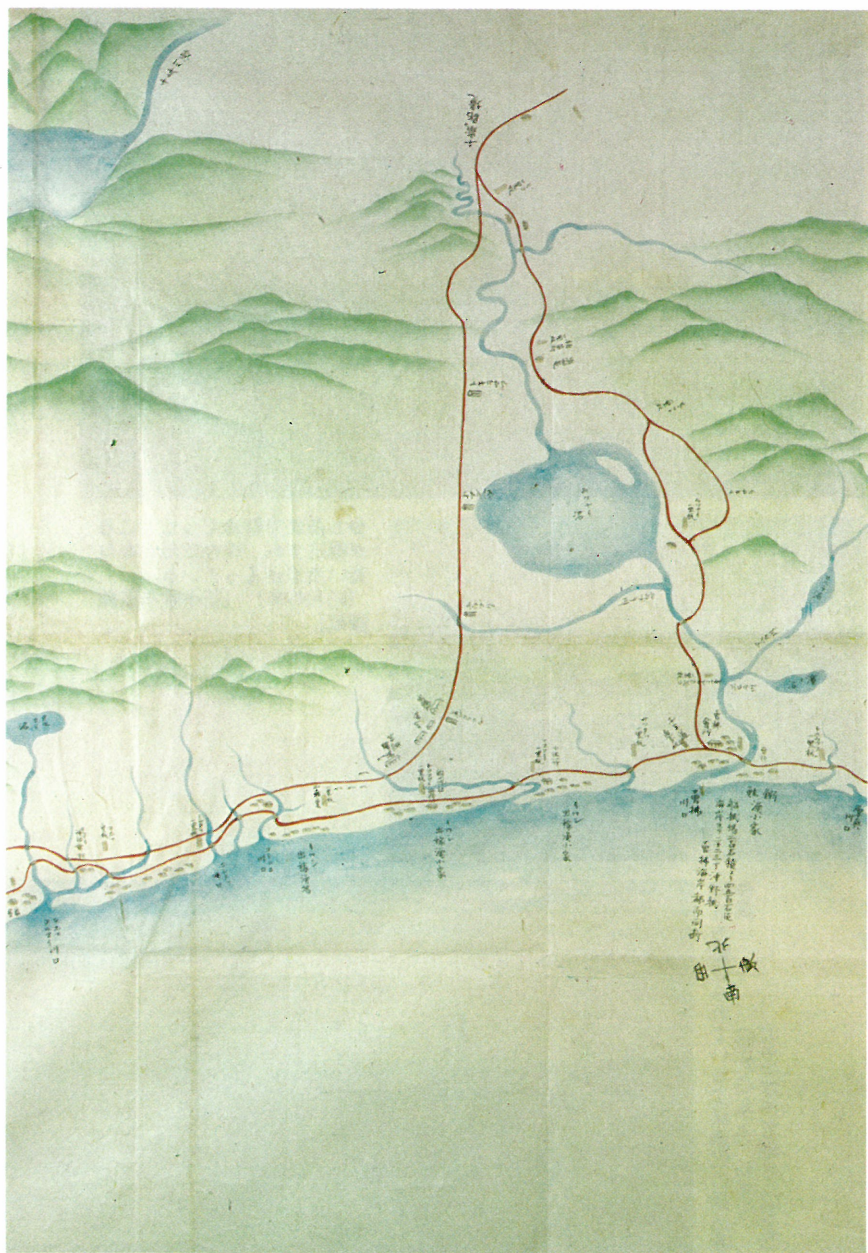
開基百年を記念して建設された勇弘千人同心
(昭和48年)〔苫小牧市史編さん室蔵〕



千人同心などの眠る勇弘史跡公園 (昭和49年)〔苫小牧市史編さん室蔵〕



由宇佛管内略図（罕有日記安政4年）〔市立函館図書館蔵〕



勇払郡略図（開拓使記録局、明治7年）〔北海道大学図書館蔵〕

苫小牧港



少し前まで陸地だったところが掘込まれ、現在は港となり
青い海水が入っている
(昭和49年)〔苫小牧市広報
課蔵〕

現在も続けられている工業港区の掘込み
作業
(昭和43年上、49年下)

〔苫小牧市史編さん室蔵〕





石炭埠頭とセメント基地
(昭和49年)〔苫小牧市広報課蔵〕



雑貨埠頭の紙積み込み作業
(昭和49年)〔苫小牧市広報課蔵〕



木工団地と臨海工業地帯 (昭和49年)〔苫小牧市広報課蔵〕



国道36号線「末広町」(昭和49年)〔苫小牧市史編さん室蔵〕



市 民 会 館 (昭和48年)〔苫小牧市広報課蔵〕



駅前通り (昭和47年)
〔苫小牧市史編さん室蔵〕



国道36号線「旭町」 (昭和47年)
〔苫小牧市史編さん室蔵〕



駅前副道 (昭和49年) 〔苫小牧市広報課蔵〕

苫小牧点描



スケートまつり（昭和49年）〔苫小牧市広報課蔵〕



港まつり（昭和49年）〔苫小牧市広報課蔵〕



さくらまつり（昭和47年）
〔苫小牧市史編さん室蔵〕



緑ヶ丘公園にて（昭和43年）
〔苫小牧市史編さん室蔵〕

老人ホームにて
（昭和44年）〔苫小牧市史編さん室蔵〕



漁港にて（昭和43年）
〔苫小牧市史編さん室蔵〕



体育館にて（昭和49年）〔苫小牧市広報課蔵〕



温水プールにて（昭和48年）
〔苫小牧市広報課蔵〕



デパートにて（昭和49年）〔苫小牧市広報課蔵〕



保育所にて（昭和44年）〔苫小牧市史編さん室蔵〕



遊園地にて（昭和43年）
〔苫小牧市史編さん室蔵〕

買物公園「二条通り」（昭和47年）〔苫小牧市広報課蔵〕





大規模工業基地開発が予定されている勇払原野東部（昭和47年）〔苫小牧市史編さん室蔵〕



苫小牧市史の発刊にあたって

苫小牧市長

大泉源郎

苫小牧市は、昭和四十八年開基百年を迎えましたが、本市史はこれを記念して発刊するものであります。

苫小牧地方は、もともと漁業を中心とする寒村であり、沿岸一帯を「樽前浜」と称し、イワシの千石場所として知られたところで漁期にかぎって多くの出稼人でにぎわいを見せたところでもあります。

しかしながら、この地に定住者が多くなると、未開の広大な勇払原野を開発して、なんとかして住みよいところになろう、住民の生活を豊かにしようということを願って、いろいろな努力が払われてきました。

この勇払原野開発の先駆者となったのは、遠く寛政十二年（一、八〇〇）武州多摩八王子から蝦夷地の警備と開墾のため、勇払場所に行ってきた八王子千人同心とその子弟たちであります。その開墾は予想以上の困難に遭遇し、多くの犠牲者を出し、四年にして放棄されました。しかし、千人同心の困苦と飢えに耐えながらの努力は後世の屯田兵のらんしようとなり、本市開拓の嚆矢をなすものであります。

明治四十三年九月、王子製紙は勇払原野の西端に大製紙工場を建設し操業を開始しましたが、これは工業による勇払原野開発の第一歩を印し

たもので、勇払原野開発の新しい指針となり、本市は急速に工業都市へと移行して、今日の基盤をつくるに至りました。

そして、さらに本市の発展を願った先輩たちは勇払原野の総合的開発、苫小牧港の築設に情熱を燃やしてきたのであります。この本市多年の念願は多くの先輩たちの努力によって、昭和三十八年苫小牧港の開港、臨海工業地帯の造成によって実を結びました。

さらに、昭和四十五年、第三期北海道総合開発計画の樹立にともない、勇払原野東部は北海道開発の拠点としてとりあげられ、ますます発展が期待されております。本市は、この苫小牧東部開発にあたり、独自の開発計画を進め、地の利を生かし、人の和を得て、健康で住みよい福祉文化都市、公害のない新しい工業都市、活力のある機能都市、自然を守り・育てる緑の都市を目標に、人間尊重の都市建設を目指しております。

「過去」を知ることが「現在」を正しく認識するためにも必要欠くべからざることであり、本市史がこうした意味で正しく活用されることを切望してやみません。

なお、本市史の編さんにあたった編さん員諸君の労を多とし、監修をいただいた高倉、大場両先生、編さん委員各位に対し深く感謝の意を表する次第であります。

昭和五十年三月十二日



苦小牧市史の刊行をよろこぶ

苦小牧市史監修者・高倉新一郎

戦後間もなく計画準備されて多くの人の努力が払われたにもかかわらず、難航を続けた「苦小牧市史」がようやく堀江敏夫君を中心とする人々によって誕生することになった。昭和十五年「苦小牧町史」が刊行されて以来の壮事である。町史刊行の時、円空作樽前権現を当時の錦多峰神社で発見して以来親しくなった編集者酒井仁之進先生の依頼によってその序文を書く光栄に浴した私は、それから後、いろいろな機会に縁がつながり、種々の相談を受けるようになっていたが、市史編集が行き悩んだ時にも相談を受け、遂に監修者になることによって、その難局打開に微力を致すことになった。といって、私は何もしたわけではない。すべては土地の事情に明るい、熱心な堀江君に任せ、時々相談を受け、開基百年記念には「広報」に「苦小牧の誕生」と題して、今日の苦小牧が生まれるまでの経過を書いただけである。しかし、市史の原稿が上手にまとめられ、完稿を見せられて安心した。

市史でも明らかなように、苦小牧は我が国で特別な位置を占め、北海道でも特別な環境を、そして歴史を持つところでありながら、太平洋の荒波が寄せる東海岸の長い砂浜に寄せる鰯漁の出稼場に過ぎなかった。

ところが、交通の要衝となり、やがて一大工場地帯となり、最近は人工港湾が開発されて、先進函館・小樽・室蘭をしのいで北海道の表玄関になつているのみか、火山灰と濃霧のために殆んど不毛の地と考えられていた勇払原野を一大近代都市圏に化しようとしている。その経過は目ざましい北海道の開発史の中でも最も目ざましい、且つ近代的な発展であつた。しかし、それまでにした先人の先見と苦勞はまた一入のものであつた。市史はその経過と、批判と反省を交しながら、克明に描いている。私は新興苫小牧市のために、これを基礎として、悔を残さない発展を遂げられんことを祈つて止まない。

昭和五十年三月十二日



苫小牧市史の発刊まで

苫小牧市史編さん委員会座長 門脇松次郎

苫小牧市は、昭和十五年に故田中正太郎・酒井仁之進先生によって編さんされた「苫小牧町史」以来久しく町史・市史の発刊はなく、しかも苫小牧町史においては、大正期をもって筆を終えているため、市民各層から市史の発刊が望まれておりました。

こうした中で、苫小牧郷土文化研究会や郷土史家によってこつこつと資料収集が続けられておりましたが、市当局においても昭和三十八年三月「苫小牧市史編さん規程」を公布し、執筆者、編さん室職員の発令を行い、いよいよ本格的な作業に入ることになりました。さらに、同四十四年には市史編さんに関する意見を求める機関として苫小牧市史編さん委員会が発足したのであります。

しかしながら、前執筆者においては健康を損われるなどから思うような進展がなく、市史は行き詰まりの状態となっていました。

ここにおいて登場したのが、現編集長の堀江敏夫君で、彼はこの難局を打開するため北海道史の最高権威者である高倉新一郎先生のもとに何度か足を運びその助言をうけ、私もしばしば相談をうけたのであります。こうして、昭和四十六年七月には、堀江君を中心とする新編さん員ス

タッフを編成、監修者には高倉新一郎、大場利夫の両先生をご委嘱し、精力的な作業が進められ、ついにその成果がここに実ったのであります。

苦小牧は現在開発問題で大きくゆれ動いております。こんな時、苦小牧の自然が、開発がどのような経緯をたどってきたのかを改めて知ることは極めて有効なことであり、かつ重要なことであると思います。

苦小牧市は、大正十年の大火で多くの資料を失い、古い資料（史料）の誠に乏しい中での編さんは並大抵の努力ではなかったと思います。編さん員諸君に対し深く敬意を表するとともに、多くの助言と意見をいただいた藤田隆一、高野丈夫、木村寿治郎、山口照和、森田勇、藤瀬愿、望月昭七、新岡正敏、工藤勇二の新旧編さん委員、事務当局のご努力、ご協力に深く感謝申し上げる次第であります。

昭和五十年三月十二日

例 言

一、本史は苫小牧市史上巻とし、自然環境、先史時代、アイヌ時代、幕藩時代、行政史、産業史の六編から構成し、行政史、産業史は明治以降とし、それ以前は各編においてあつかい、一部を除き昭和四十九年までの史実を集録した。

二、漢字は本文においては当用漢字を、引用文献については出来るだけ原文のままとした。なお、専門語、時代用語などはそのまま生かした。

三、引用文等は「」で囲み、あるいはやや小さな文字を用いて字下げを行い本文と区別した。また、句読点、濁点等を付して読みやすくすることにとめた。

四、引用文、図表、写真には、その出典、文献名、所有者を表記するほか、一部引用文、参考文献などについては注記を付した。

五、本史本文に集録した人々はその性格からすべて敬称を省いた。

六、本史の先史時代については北海道大学教授大場利夫博士に、そのほかの各編については北海道大学名誉教授高倉新一郎博士に監修をうけた。

目

次

目次

苦小牧市史 上卷

苫小牧市史の発刊にあたって		苫小牧市長 大泉 源郎
苫小牧市史の刊行をよろこぶ		苫小牧市史監修者 高倉新一郎
苫小牧市史の発刊まで		苫小牧市史編さん委員会座長 門脇松次郎
第一編 自然環境		39
第一章 位置と面積		41
第一節 位置		41
第二節 面積		42
第二章 気 候		43
第一節 気象概説		43
第二節 気温・湿度		46
第三節 風向・風速		56
第四節 降雨・降雪		60
第五節 海流・海霧		64
第六節 現象日数		66
第三章 地質と地史		75

第一節 地質	75
第二節 地史（苦小牧平野のおいたち）	81
第三節 土壌と地下資源	89
第四章 地形	93
第一節 山地・台地・低地	94
第二節 河川・湖沼・湿原	96
第三節 海岸線・砂丘・海底地形	108
第五章 火山と地震	115
第一節 樽前山とその噴火	115
第二節 温泉と地下水	120
第三節 地震	125
第六章 植物	131
第一節 植物相的特徴	131
第二節 植物地理学上からみた分布	134
第三節 植物相の概観	139
第七章 動物	151
第一節 魚類	151
第二節 昆虫類	156
第三節 鳥類	164
第四節 哺乳類	169

第二編 先史時代……………173

第一章 先史時代概説……………175

第一節 人類のあけぼの……………175

一、地球の歴史と人類の出現……………175

二、文化の發展段階と先史時代区分……………178

第二節 旧石器時代……………181

第三節 縄文時代……………185

第四節 続縄文時代……………198

第五節 擦文時代……………203

第六節 アイヌ時代……………207

第二章 遺跡及び遺物……………211

第一節 研究のあゆみ……………211

第二節 遺跡の分布……………220

第三節 縄文時代の遺跡と遺物……………245

一、生活用具……………245

二、住居と集落……………259

三、狩猟と漁労……………261

四、衣服と装身具……………268

五、信仰と墳墓……………269

第四節 続縄文時代の遺跡と遺物……………273

第五節	擦文時代の遺跡と遺物	280
第六節	アイヌ時代の遺跡と遺物	286
第三編	アイヌ時代	293
第一章	和人の蝦夷地進出とアイヌ	295
第一節	胆振鉏の記録	295
第二節	アイヌ社会の成立	300
第三節	和人との戦い	307
第二章	苫小牧地方のアイヌ	313
第一節	勇払アイヌ	313
第二節	生活と文化	320
一、狩猟		320
二、漁労		323
三、農耕と植物採集		325
四、交易		329
五、住居		332
六、衣服と装身具		334
七、食生活		336
八、信仰		339
九、結婚		343

一〇、出産・成人	345
一一、葬儀	347
一二、巫術と呪術	350
一三、医療	353
一四、社会規制	355
第三章 苫小牧市アイヌ語地名	359
第一節 アイヌ語地名の意義	359
第二節 アイヌ語地名解	361
一、太平洋沿岸	361
二、美々・勇払川流域	370
第四編 幕藩時代	381
第一章 松前藩と勇払	383
第一節 松前藩の成立と商場	383
第二節 寛文蝦夷乱と勇払	392
第三節 しこつ一六場所	403
一、一八世紀初頭の商場	403
二、場所請負制の発生	408
三、場所請負制の発展	414
四、交易と交換価格	442

第四節	寛政蝦夷乱と勇払アイヌ	445
第五節	円空の樽前権現像	450
一、	円空の蝦夷地渡来	450
二、	錦岡の円空仏	458
第二章	幕府直轄と勇払	465
第一節	直轄の経緯と勇払場所	465
一、	ロシアの南下と蝦夷地経営論	465
二、	勇払場所の成立	469
第二節	八王子千人同心の移住	477
一、	蝦夷地出役志願	477
二、	移住と開拓	482
三、	箱館奉行転属	495
第三節	直轄下の警衛	499
第四節	勇払場所の直轄経営	507
一、	幕府直捌き	507
二、	請負制の復活	517
第五節	勇払越え	524
一、	記録からみた勇払越え	524
二、	沿岸路の整備	530
三、	内陸路の開削	534

第六節 勇武津不動と千人同心墓碑	542
一、八王子千人同心子弟とその家族	546
二、箱館(松前)奉行の役人とその家族	549
三、勇払場所役人の家来	551
四、勇払場所請負商人山田家の番人	552
五、身分不詳の墓	552
第三章 松前家復領と勇払	557
第一節 復領後の藩政	557
第二節 勇払場所の経営	564
一、請負人山田屋の独占	564
二、鰯漁業の発達	569
三、アイヌの漁場労働	575
第三節 ウラエ訴願事件	584
一、事件の背景と原因	584
二、石狩アイヌの訴願	589
三、紛争の解決	604
第四節 復領下の勇払	608
第四章 幕府再直轄と勇払	629
第一節 再直轄の経緯と警備	629
第二節 幕府の対蝦夷政策	637

第三節 場所請負と山田屋	648
一、生産の進歩	648
二、山田屋の事蹟	662
第四節 幕末の交通	670
一、内陸路の拡充	670
二、沿岸路と旅日記	681
第五節 堂社の發達と変遷	686
一、勇武津弁天社	686
二、竜神社と蛭子神社	695
第五編 行政史	705
第一章 行政制度の変遷	707
第一節 開拓使と勇払	707
一、明治維新と勇払	707
二、開拓使の設置と高知藩の支配	712
第二節 苦小牧時代の出現	727
一、開拓使郡出張所と戸長	727
二、開拓使郡出張所の移転とその後	743
第三節 郡役所と戸長役場	768
一、北海道の行政機構と郡区町村制の実施	768

二、郡役所の設置……………	775
三、戸長役場の設置……………	786
四、苦小牧外一五カ戸長役場……………	804
第四節 町村制の確立……………	824
一、苦小牧村の誕生……………	824
二、町制施行と一級町村制……………	847
第五節 昭和前期の町政……………	874
一、町村制の度改正とその後の町政……………	874
二、不況下における町政……………	912
三、王子製紙と町政……………	924
四、戦時下体制と町民……………	941
第六節 市制施行と地方自治……………	958
一、市制施行前後の行政……………	958
二、大都市建設をめざして……………	991
第二章 財政と議会……………	1047
第一節 財政と税務……………	1047
一、自治体以前の財政と税……………	1047
二、二級町村制時代の村予算と村税……………	1075
三、一級町村時代の町予算と町税……………	1086
四、膨張する市財政と市税……………	1111

第二節 選挙と議会	1151
一、戦前における各種選挙結果	1151
二、戦後における各種選挙結果	1181
三、苦小牧の村町会と市議会	1213
第三章 人口と町名地番	1269
第一節 戸数と人口	1269
一、分村前の戸数と人口	1269
二、村制以降の人口の変化	1294
三、国勢調査と職業別人口	1308
第二節 町名地番の改正	1330
一、市街地の設定	1330
二、町名地番の設定と改正	1332
第 六 編 産 業 史	1357
第一章 農林水産業の変遷	1359
第一節 漁 業	1359
一、漁場制度と出稼漁	1359
二、漁場の解放と沿岸漁業の変化	1387
三、植田漁場の放棄と飯田・石垣漁場の登場	1406
四、樽前浜のイワシ漁法と魚粕製造	1420

五、漁業法と免許漁場	1431
六、漁業統計と他貨漁業の性格	1444
七、王子製紙と漁業	1457
八、漁場の再編成と沖合漁業	1470
九、地曳網漁業から定置網漁業へ	1490
一〇、免許漁業と専用漁業	1512
一一、漁業制度改革と苫小牧漁業の変化	1533
第二節 農業・酪農業と牧畜業	1563
一、開墾のあけぼの	1563
二、国有未開地処分法と開墾状況	1578
三、農業改良計画と農業者	1591
四、勇払原野の開拓運動と混同農業	1609
五、昭和初期の農業者と農産物	1625
六、農業の組織化と戦時下農業	1639
七、終戦直後の農業と開拓者の入植	1652
八、農業の振興期	1671
九、農地転用と農家の減少	1681
一〇、牧畜業と馬市	1688
第三節 林業と製炭業	1727
一、山林管理と林木処分	1727

二、木材利用と造林事業……………	1738
三、戦後の林業……………	1757
四、製炭事業……………	1773
第二章 工業と鉱業の変遷……………	1787
第一節 工業の発達……………	1787
一、工業のはじまり……………	1787
二、マッチ工場……………	1795
三、王子製紙の進出……………	1806
四、確立した苫小牧の工業と諸工場の概況……………	1828
五、王子の下請業者と人夫たち……………	1839
六、昭和初期の工業……………	1850
七、大工業都市への基盤整備……………	1859
八、臨海工業地帯の造成と複合産業都市の確立……………	1877
第二節 苫小牧の鉱業……………	1889
あとがき……………	1903
●題字 二階堂 北翠（北海道書道展・創玄書道審査員）……………	
〔表〕飛彈屋文書蝦夷國之図（下呂町郷土資料館蔵）……………	
見返し……………	
〔裏〕苫小牧市街地航空写真（和広エンタープライズ蔵）……………	

